

不登校の要因

不登校に陥る状況や心理(要因別)

友人関係

- 意見の相違や冗談、からかいなどがきっかけとなり、喧嘩や仲違いといった軽微なトラブルが発展し、解決できないまま長期化し、不登校に陥る状況が多い。
- トラブルが起こった際、軽微であるため当事者や周りも大したことではないと気に留めなかったり、解決したい気持ちはあるものの一人では言い出せず、そのままの状態です。
- その状況が続くとトラブルとなった相手や周りの級友が自分のことをどう思っているか不安になったり、孤独感を味わったりし、解決できないことにストレスを感じるようになる。
- その結果、心理的に不安定な状況が長期化し、不登校に陥る。

教員との関係

- 担任や教科担当教員、部活動顧問など教員からの言葉や態度がきっかけで教員の考え方や指導方針に違和感を持つようになる。このことを教員が感知せず、放置することによって不登校に陥る状況が多い。
- 児童生徒は、教員の言葉や態度の真意が分からず、不安になったり怒りを感じたりするが、その真意を教員に直接問いただすことができない状況が続くことでストレスを感じる。
- 教員がその状況に気づかず、再び同じような言動や態度を繰り返すと、児童生徒は教員に対する失望、怒りといった感情がわきあがるとともに、自分が教員に認められていないといった孤独感や虚無感から自尊心の低下を引き起こす。その結果、自身が学校や学級へ登校する意味を見いだせなくなる。

学業不振

- 学習のつまずきがもとで不登校になる。学習のつまずきが起る状況を大別すると、以前から基礎的な学習理解が不十分なまま進級し、学習内容の高度化、学習量の増加に伴い、学習についていけなくなる状況と、今までは学力に不安はなく学校生活を送っていたが、進級、進学時等に新しい学習内容の理解が難しくなり、学習についていけなくなる状況がある。特に後者の場合、これまでできていたことができなくなる、理解できたことが理解できなくなることにより、失意が大きくなる。
- 学習が困難な状況になると、児童生徒は授業を受けることに苦痛を感じ、学習に対する抵抗感を強く持つようになり、教室の中での存在意義が薄れていく。その結果、学習意欲が低下し、さらに学習の遅れが大きくなる。
- このような状況が続くと、徐々に無気力になり、学校へ通う意欲も低下し不登校に陥る。

本人の特性

- 本人の特性について周囲の理解や配慮がされないまま見過ごされ、状況の変化に適應することの難しさを抱えながら学校生活を送るなかで徐々に苦痛やストレスを感じ、不登校に陥る状況が多い。
- 感覚過敏、聴覚過敏や視覚の感覚処理等の難しさを抱える児童生徒にとっては、周りの音や声、集団での活動等、学校で起こる様々なことが予測困難であり、苦痛や不安を感じるようになる。
- 物事へのこだわりの強さ、コミュニケーションの苦手な児童生徒は見た目には分かりにくく、その特性を周囲から理解されにくいいため、その児童生徒に対し、否定的な評価や不適切な対応がされてしまう。
- そのような状況が続いた児童生徒は、自身に対し否定的になり、自尊心が低下する。加えて周囲からの疎外感や孤独感を強く持ち、登校困難になる。

家庭環境

- 児童生徒にとって、家庭が心身を休め、エネルギーを回復する場所になっていない状況下で不登校に陥る状況が多い。
- このような状況が生まれる背景として家族間の問題や経済上の問題があり、保護者自身も日々の生活を営む上で困難に直面していることが多い。
- そのため、家庭内に緊張があったり、休む間もなくやらなければならないことが次々あるような状況においては、保護者等がそれぞれ自分のことで精一杯になり、児童生徒が帰宅しても保護者等に気にかけてもらえず、家族間の必要なコミュニケーションが希薄になる。
- 保護者自身が余裕のない生活となってしまふことで児童生徒もストレスを感じ、その結果、心身の疲労を十分に回復したり相談することができない状況が慢性化し、徐々に登校意欲が低下したり、他者との関わりを避けるようになっていたりする。